

Not-God

『アルコールリクス・アノニマスの歴史』

Ernest Kurtz (アーネスト・カーツ)

第2部 解釈

第七章 米国史のより広い文脈で

Presented by
GAコーナーストーン

1

第七章 米国史のより広い文脈で

Not-God 261-264

AAの発展と成長①

- AAは、「絶対性」「アルコール以外の問題」「特別グループ」などのややこしい問題にもかかわらず、ビル・Wや草創期のメンバーがいなくなったあとも発展・成長
 - ビルたちの生きた時間と証された効果が、12のステップと12の伝統のなかに凝縮
 - AAのフェローシップには、組織固めを避ける性質があり、厳格さを食い止める働きがある

2

AAの発展と成長②

- 特に、成年に達するまでの形成期（1935年～1955年）にあったことは意義深い
 - 12のステップと12の伝統の成文化
 - 『アルコホーリクス・アノニマス』と『12のステップと12の伝統』の刊行
 - メンバー数の増加（2人→133,000人）
 - 組織の国際化

3

AAの発展と成長③

- 最初の20年間（1935年～1955年）を3つの時代区分に分けて考える
 - 1930年代
 - 大恐慌、孤立主義
 - 1940年代
 - 第二次世界大戦、冷戦
 - 1950年代
 - 朝鮮戦争、公民権運動

4

AAの発展と成長④

- この時代にAAメンバーが学んでいたこと
 - 飲酒やその他の手段によって否認することの危うさ
 - 制約という現実
 - 平等の真の基礎
 - こうした気づきを合理化してごまかそうとするあらゆる試みがもつ嗜癖的な性質

AAの起源① - AAのフェローシップとプログラムは、深いレベルで米国的である

- カール・ユング *Not-God* 39-40
- AAの歴史において、ユング博士が担った重要な役割
 - 医学的・精神医学的治療に関するかぎり、**絶望的**である
 - **霊的**または**宗教的経験**、**本当の回心の経験**が、まれに回復に導くことがある
- しかし、あくまで間接的な役割
 - ビルが自分自身の洞察を理解し強化するためのあとづけ
 - AAとユング博士とを結びつけるようになったのは、晩年になってから
 - 心理学的説明の影響



第七章 米国史のより広い文脈で

Not-God 265-266

AAの起源② - AAのフェローシップとプログラムは、深いレベルで米国的である

- オックスフォードグループ *Not-God* 95-99
 - 英国的な名前がついているが、**米国的**なもの
 - フランク・ブックマンの背景
 - ペンシルバニア敬虔主義の影響を受けたルター派牧師
 - 伝統的な福音主義的プロテスタント
 - 米国の偉大な伝道者ドワイト・L・ムーディーに影響



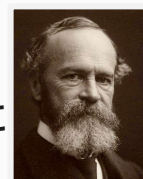
7

第七章 米国史のより広い文脈で

Not-God 265-266

AAの起源③ - AAのフェローシップとプログラムは、深いレベルで米国的である

- ウィリアム・ジェイムズ(1) *Not-God* 59
 - ジェイムズの思想とAAの思想の実質的なつながりに知的な敬意を払うべき
 - 『**宗教的経験の諸相**』
 - キーワード・概念「回心 (conversion)」
 - 重要な局面でビルに実際に影響を及ぼした
 - プログラムの「霊的な側面」が腑に落ちないとこぼす者にはだれでも決まってこの本を勧めていた



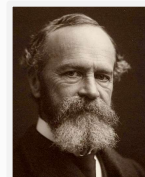
8

第七章 米国史のより広い文脈で

Not-God 265-266

AAの起源④ - AAのフェローシップとプログラムは、深いレベルで米国的である

- ウィリアム・ジェイムズ(2) *Not-God 59*
 - ジェイムズの思想は「**米国人らしさ**」をもっていて、宗教的洞察に実用主義的な多元主義を当てはめていた
 - **プラグマティズム、実用主義** (pragmatism)
 - 人間の行為に良い影響を及ぼし、人の幸福や生活に役に立つ考え方であれば、それを真理と見なす考え方
 - AAの思想の「市場価値」のために、プラグマティストであるジェイムズをプラグマティックに活用
 - **多元主義** (pluralism)
 - 違いに寛容
 - アルコホーリックは「絶対的に考える」



9

第七章 米国史のより広い文脈で

Not-God 265-266

AAの起源⑤ - AAのフェローシップとプログラムは、深いレベルで米国的である

- AAは、野球、アップルパイ、ホットドック、7月4日（米国独立記念日）と同じくらい**米国**を連想させるもの
 - 将来に希望を求めて鉄道の旅を続けるセールスマン
 - ジョン・D・ロックフェラー・ジュニア & ネルソン
 - アイヴィー・リー社
 - ハリー・エマーソン・フォスディック
 - サタデーブニングポスト
 - ジャック・アレクサンダーなどのジャーナリスト



10

啓蒙主義① - 米国的とは何か

啓蒙主義 (enlightenment)

- 理性によって伝統的な因習・迷信・偏見・無知から人間を開放する思想運動
- 英語のenlightenmentの本来の意味は、明るくすることで、**理性の光で無知蒙昧の暗闇を明るく照らしだす**ことをあらわす
- 17世紀の近代自然科学の誕生によって、実証的な科学的認識が広まり、また、経済力をつけた市民階級が政治的な発言力をもつ中で、人間社会を**合理的**に考察して、社会の諸制度や文化を**合理化**しようとする要求が高まった
- そのような時代背景のもとで、啓蒙思想は**人間の理性に無限の信頼**をおき、伝統的な因習や束縛を打破し、政治・道徳・宗教を**理性に基づいて合理的**にとらえ直そうとした。

濱井修監修、小寺聡編「倫理用語集 第2版」(山川出版社、2019年) p.212

11

啓蒙主義② - 米国的とは何か

- 「米国的」とはすなわち「近代的」
 - AAは、近代がもたらす問題に独特のかたちで立ち向かってきた
- 啓蒙主義＝米国的＝発展＝近代的
 - 米国は、啓蒙主義に由来する誓約によって新たに生み出された
 - AAの米国らしさという重要な面をもっともよく理解するために必要な枠組み
- 啓蒙主義の特徴は、「**自律 (autonomy)**」
 - 個人ひとりひとりが本質的に独立
 - 自分で目標を設定し、それを達成するために**理性**を用いる
 - 権威よりも**理性**が、私たちを真理と幸福に導く

12

啓蒙主義③ - 米国的とは何か

- ・ 啓蒙主義で重視される目標
 - ① 合理化とコントロール
 - ② 相対主義
- ・ 啓蒙主義で否定されたもの
 - ① 神秘的な力
 - ② 絶対的なもの

13

啓蒙主義④ - 米国的とは何か

- ・ 啓蒙主義の矛盾
 - ① 人間の際限ない欲望
 - ・ 質から量へ
 - ・ 「何のために」という問いの答えは「もっと」へ
 - ② 合理化とコントロールの喪失
 - ・ 近代自身が神秘的なものを生み出した
 - ・ 巧妙に新たに世俗化されている e.g. 病因をめぐる論
 - ③ アイデンティティの危機
 - ・ 究極的な実在は内奥に隠されている
 - ・ 自分が何者かは外側から与えられる

14

啓蒙主義への批判①

脱啓蒙主義（ポストモダン）

- ポストモダンの思想は、世界全体を大きな思想的枠組みで解釈する近代哲学を放棄し、多様な思想が差異を認め合い、抗争しながら共存する過程に注目する。
- 多様な価値観が共存する現代の多元的世界では、具体的・個別的な状況で思索する「小さな物語」がふさわしい。

—— 濱井修監修、小寺聡編「倫理用語集 第2版」（山川出版社、2019年）p.278

啓蒙主義への批判②

- 脱啓蒙主義（ポストモダン）の特徴
 1. 相対主義
 - 物事に対して開かれた姿勢
 - 人間は変わることができる
 - 物事の本質などない
 2. アイデンティティのさらなる危機
 - 役割や過程によって変化
 - 人格という概念を軽視
 - アイデンティティを支える基盤とはなりにくい

第七章 米国史のより広い文脈で

Not-God 270-274

啓蒙主義への批判③



- 二つの古典的な研究

マルクス主義

- 【労働】 一般には、労働とは生活のための手段を獲得する活動をさすが、マルクスは、**労働を欲求の充足以上の人間の本質的な活動**とした。
- 【労働の疎外】 労働は、本来は人間が自己の能力を発揮し、**自らがつくった生産物の中で自己自身を確認する喜ばしい活動**であるが、その労働の意義が資本主義社会で失われている

—— 濱井修監修、小寺聡編「倫理用語集 第2版」（山川出版社、2019年）p.235

- 近代について批判
- 労働者が労働の結果として生み出した生産物から労働者を引き離す資本主義に抵抗
- 人間は生産物や商品にはけっしてなってはならない

17

第七章 米国史のより広い文脈で

Not-God 270-274

啓蒙主義への批判③



- 二つの古典的な研究

実存主義

- 19世紀の合理主義や実証主義に対して、そのような**客観的な抽象的思考では把握できない個としての人間の立場を強調**し、孤立・不安・絶望・苦悩の中に生きる**個別的・具体的な「この私」の存在を探究**する思想的な立場
- 実存主義は、抽象的な一般的普遍性には理解しえない個別者としての人間をとらえ、**自己の在り方を自ら選択し、決断する自由な主体性としての実存の確立**をめざす。

—— 濱井修監修、小寺聡編「倫理用語集 第2版」（山川出版社、2019年）p.244

- 存在することと行為することの関係を考察
- 世界内存在としての人間の実存の真実は失われている（人間疎外）
- 存在そのものや何ものであることに注意を絞る

18

啓蒙主義への批判④

- 心理療法
 - 1. 深層心理学
 - 内面に隠された実在に注意深く焦点を当てる
 - 2. 行動療法
 - 行動や手段を変えるのを手助けする
- アイデンティティに対する問いには答えない
- 心理療法が目指すのは、全体性の回復ではなく理解することにすぎない
- 心理療法が希望を扱うようになると、宗教にたどりつく
- AAは、20世紀の米国の希望を表した宗教



19

20世紀の米国の歴史①

- 進歩主義（1900年代）(1)
 - 人間の幸福と充足に奉仕するための**合理化**と**コントロール**を拡張
 - 米国人として存在することは、行動し生産すること
 - 米国人として成熟した大人になるための通り道・基本は、「模倣すること」と「米国社会になじむこと」
 - **合理化**と**コントロール**による科学技術・経済での成功を、政治・心理に応用
 - 米国は、近代の完成の入り口にたどりついたと確信

20

20世紀の米国の歴史②

- 進歩主義（1900年代）(2)
 - 進歩主義への疑い
 - 合理化とコントロールを人間自身に当てはめる方法には、本質的に問題
 - 効率性と民主主義という二つの目標を追求することは、達成できるどころか矛盾を抱えるもの
 - 米国は、近代の完成の入口を通過さえしなかった

21

20世紀の米国の歴史③

- 理想主義と孤立主義（1910年代）
 - 第一次世界大戦への介入
 - ヴェルサイユ体制の矛盾
 - インフレと格差
- 狂騒の20年代（1920年代）
 - 成果を上げた運動
 - ウォール街大暴落



20世紀の米国の歴史④

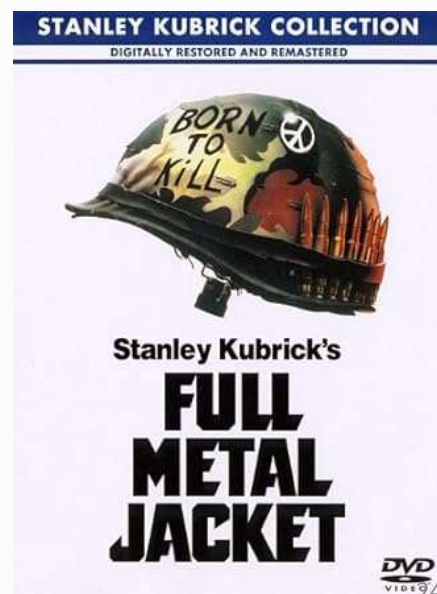
- 大恐慌（1930年代）
 - 不景気
 - ニューディール政策
- 第二次世界大戦と冷戦（1940年代）
 - 実質のない勝利
 - 新たな不安



23

20世紀の米国の歴史⑤

- 朝鮮戦争（1950年代）
 - 人間の有限さ
 - 懐疑と満足感
- 過剰と限界（1960年代～70年代）
 - ヴェトナム戦争
 - 消費者運動
 - ウォーターゲート事件



20世紀の米国の歴史⑥

- 総括
 - 合理化とコントロールのための献身的な努力は、一つの人間理解をもたらした
 - あらゆる出来事や複雑にからみあったことが、新たに説明可能になったとしても、それらを効果的にコントロールすることはできない

25

20世紀米国史の四つの矛盾①

- ① 合理化とコントロール
 - 合理化とコントロールの躍進そのものが、合理化とコントロールが不可能であることを証明
 - 合理化とコントロールへの渴望は、それを実現するたびにますます空虚に感じる
 - 近代は、目標を達成するために理性を用いるが、それは際限なく依存させる性格をもつ

26

20世紀米国史の四つの矛盾②

② アイデンティティの喪失

- ・ 究極的実在は、自分の内奥に隠されたものという理解と、
他者と心からの関わりをもつことで自分が何ものかを
知ろうとするものの対立
- ・ アイデンティティについては、達成するどころかどんどん
ゴールから遠ざかった

27

20世紀米国史の四つの矛盾③

③ 人間の限界

- ・ 近代は能力が限られていることを無能と同じに考える
- ・ 達成できない目標については否定する
- ・ 「あれかこれか」ではなく「一つだめならすべてだめ」
オール・オア・ナッシング
- ・ 人間には限界があるという概念を否定することに限界がある

28

20世紀米国史の四つの矛盾④

④ 進歩主義

- 進歩主義がもつ矛盾はいつかは向き合わなければならない
- 人間は終わらない成長ができると考えたが、短い期間だけとってうまくいかなかった
- 多様性を誇る米国では、みなを同じにするという考えには強い抵抗があり、そのような平等に自由はないと考えた

29

20世紀米国史の四つの矛盾⑤

- 総括
 - 米国において、「近代」という豊かな概念はまず成長し、ついで痛みをともなった経験をするようになった
 - 20世紀の米国思想史において起こるあらゆる現象を理解するためには、その文脈としての枠組みを掘り下げる必要があり、AAをより深く理解するための基礎となる
 - 米国におけるこれらの問題はAAにとっての問題でもあり、AAのフェローシップとプログラムはそのためにある

30

AAが発している二重のメッセージ①

- ① 人間は「**神ではなく**」有限な存在であるが、この有限な「**神ではない者**」としての人間は、この限界のなかにも**全体性**（相補性・相互性）を見いだすことができる
- ② この板ばさみひとつひとつを解決するための、少なくとも示唆を見いだすことができる

31

AAが発している二重のメッセージ②

- 完全に**コントロール**ができると主張することや、**コントロール**の能力を否定したりするのは、どちらも人間的ではない
- AAはバランスのとれたレベルで人間的な**コントロール**をする
- AAはアイデンティティを見つけられるように取り組んだ
- AAは人間関係のあり方の適切な基盤を模索
- AAは**人間には限界がある**という感覚がどのように妨げられるかをおさえることに力を入れた

32

AAを研究する二つの価値①

- ① AAは近代がもつ矛盾に対する診断と治療を提供
- ② AAは文化に深く根ざしながら、同時に文化の外に立つこともできる
 - これまで多くのより正統的な研究がイデオロギーの罫に足をすくわれてきたので、AAはこれらの問題に自覚的に向き合っている
 - どのような源泉からフェロシップが始まったかを探求し、近代の矛盾をどのように診断しどんな治療を処方するか、というAAのプログラムのよりどころとなっている基盤を分析する